

14 植民地時代朝鮮のハンセン病医療に

従事した医師周防正季

魯 紅梅

二〇〇二年一月に、演者は植民地時代ハンセン病史の聞き取り調査および資料収集のため韓国を訪れた。本報告は、その際調査した植民地時代における小鹿島ハンセン病療養所第四代院長周防正季について述べる。周防正季に関してはすでに先駆たちの論文があるが、それらには互いに齟齬があり、周防に対する評価も異なる。今回改めてその事実関係を紹介する。

周防正季は一八八五年十月八日に滋賀県栗太郡老上村字矢橋（現草津市矢橋町）に出生、十七歳のとき同村の医者周防俊彦の養子となった。一九〇九年愛知県医学専門学校（現名古屋大学）を卒業。一九二一年三月三十日に朝鮮総督府京畿道警察部衛生課長に就任し、麻薬中毒者の退治と衛生行政に功績があることが知られる。その仕事

によって一九三二年十月二七日に京都帝国大学医学部から医学博士を取得した。

周防がハンセン病に関わるようになったのは一九三二年十二月の朝鮮癩予防協会の設立に発起人に名を連ねるときからである。一九三三年九月一日に小鹿島慈恵院長に赴任し、赴任演説に世界一の療養所を作りたいと抱負を語り、「私ハ此ノ島ニ諸君ト共ニ苦楽ヲ共ニシ、此地ニ骨ヲ埋ムル覚悟デアル」と話し、卓越した行政能力を発揮した結果、小鹿島慈恵医院は小鹿島更生園に昇格。収容患者数六千人に及ぶ世界一、二の規模を誇るハンセン病施設となった。これは患者動員により成し遂げたのである。

第一期工事は二年間の歳月を経て完成し、一九三五年年末に三七三三人が収容できるようになる。この年の日本の癩病予防改正に従い四月二十日「朝鮮癩予防令」が制定公布され、同年六月一日から「浮浪」患者への強制収容が始まった。

引き続き第二期、三期拡張工事が続き、一九三九年十月に収容定員五七七〇人規模のハンセン病療養所が作ら

れる。この時期日中戦争勃発を境に患者の処遇は次第に悪化した。

一九四〇年八月に周防の「銅像除幕式」が小鹿島で行された。同年周防は日本癩学会会長になり、九月四日から五日まで第十四回日本癩学会を小鹿島で開催した。

一九四〇年十月、朝鮮施政三十周年記念文化功労賞を受賞した。

しかし、三期におよぶ拡張工事と製炭、吠の製造、松脂の採集など各種事業を行う際に患者を酷使したために患者の恨みを買ひ、一九四二年六月二十日入園患者李春相により自身の銅像前で刺殺される。

この事件について大韓癩管理協会編『韓国癩病史』（一九八八年）には「その場に極悪無道な佐藤（三代治）がいたら殺されなかつたかもしれない。周防園長は仕事の熱意がすごかつたのは事実であり在職中に文化面でもたくさん配慮した」と記載されてある。佐藤とは周防の養子で、看護主任として患者を過酷に使役した。当時小鹿島更生園の患者であつた鄭氏は「周防はいい人だ。李春相は佐藤を殺そうとしたが、佐藤がいなかつたから園長を

殺した」と話す。周防園長の在職時、小鹿島で働いた韓国ハンセン病研究の権威である柳駿博士は「佐藤は確かにひどい。しかしそれを無視していた周防にも責任がある。当時の時代背景から周防を評価するとき、彼は忠実な官僚であつた」と指摘している。なお、「周防がいなかつたら現在のようなきれいな小鹿島はなかつただろう」と話す。

周防正季に対する評価は必ずしも一致していない。この評価の違いを医史学研究者としてその時代背景を踏まえて後世に如何に正確に伝えるかは非常に難しい。世界一の療養所建設への野望のため不休の努力を傾注した周防への客観的評価が問われる。

（順天堂大学医学部医史学研究室）